

# ベトナム戦争・鳥たちの復興

## ●調査の背景と目的

ベトナム・ホーチミン市カンザー地区には、かつて広大なマングローブの天然林が広がっていた。しかしベトナム戦争時に、アメリカ支配の南ベトナムに抗する反政府ゲリラがこの地を拠点にしていたことから、アメリカ軍によって100万ガロンもの枯葉剤が散布され、天然林の57%が失われた。“エコサイド (ecology + genocide)” と呼ばれる大規模な生態系の破壊である。



枯葉剤によって破壊されたマングローブ林

1975年、ベトナム民主共和国（北ベトナム）が全土を掌握して戦争は終結し、カンザー地区では3年後の1978年から広大な枯れ野にマングローブの植林を開始。ベトナム政府の事業や外国のNGOなどによる植林プロジェクトによって、2012年までに2万7千haを植林し、森林面積としては戦前に迫る回復を見せた。これによって土地浸食被害の軽減は達成したものの、マングローブ林の樹齢は現在わずか数十年でしかない。植林は自然に委ねた遷移ではないため、森を本来の姿に戻すには競合するニッパヤシの伐採などのメンテナンスが当面必要であるほか、種子の入手が容易であった *Rhizophora apiculata* 1種がそのほとんどの土地に植林されたため樹種が貧弱で、高い生物多様性を維持しうる林相への改良が必要であるなど、継続的な保全活動が今後とも必要とされている。



南遊の会によるマングローブ植林作業

名古屋に本部を置くマングローブ植林NGO「南遊の会」は、カンザー地区でこれらの保全活動を行うだけでなく、現場作業を通して両国の若者を交流させ、環境保全の大切さと、自分たちとは異なった文化や考え方があることを学ぶ機会を提供

し、相互理解と友好を深めることを重視したスタディツアーを毎年行っている。このツアーでは、植物の研究者によるマングローブ苗の成長過程のモニタリング調査は実施されてきたが、動物の生息状況についてはこれまで観察されてこなかった。

申請者は2013年にツアーへの参加依頼を受け、南遊の会が植林しメンテナンスしている50haの「日越青少年交流の森」において鳥類の概査を行った。また、両国の若者に野生動物を観察する機会を提供できるエコツアーの実施に向け、カンザー地区近隣にバードウォッチングの適地を探索した。2014年以降も経済的・時間的に可能な限り現地へ赴き、人工的に回復させているマングローブ林における鳥類相の調査を行いたいと考えている。



現在のカンザーのマングローブ林

## ●得られる成果

植林からの年数がわかっているマングローブ林が、現時点でどのような鳥類に利用されているかを記録として残すことができ、今後経時的な変化を見ていくうえでの基礎データを得ることができる。

また、ホーチミン市のような都会であっても書店に自国の鳥の本が全く置かれていないという  
 ような、身の回りの野生動物に関する情報が乏しい社会状況を改善したい。南遊の会は2012年、  
 カンザーマングローブ保全管理委員会と共同で当地の歴史や自然環境を概観した小冊子「カン  
 ザーのマングローブ」を発行しているが（日本語と越南語を併記）、この中ではマングローブ35  
 種が写真付きで解説されているにもかかわらず、動物種は8種のみ、うち鳥類はわずか1種、しか  
 も漂鳥が掲載されているだけである。そこで、現地調査で確認された鳥類については、生息環境  
 や行動を記録するだけでなく、写真を撮影し、撮影できなかったものについてはイラストを制作  
 することで、将来的に冊子の改訂時に代表的な鳥類の情報を盛り込むことを考えている。さらに  
 数年間の調査を経て多くの情報を蓄積することができれば、日越両国の言語で鳥類のフィールド  
 ガイドを制作することを目標としている。

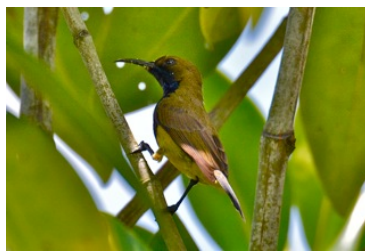
参考HP：「南遊の会」 <http://www.namdu.jp/>

越山 洋三（学術博士・野生動物画家）

資料：以下には2013年の概査で申請者により撮影された鳥類約40種のうちの一部を示す。



マレーシアセンニョムシクイ



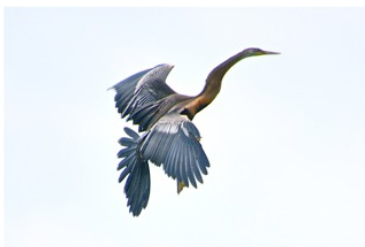
キバラタイヨウチョウ



ナンヨウショウビン



インドハッカ



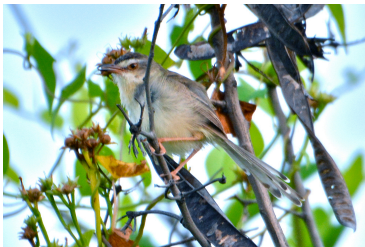
アジアヘビウ



クロラケットオナガ



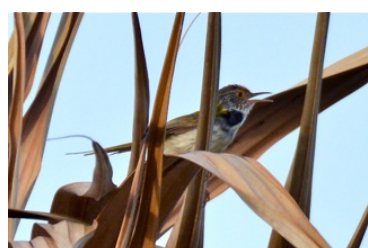
ハリオハチクイ



アジアマミハウチワドリ



チョウショウバト



オナガサイホウチョウ



キビタキ  
 申請者による色鉛筆画。出  
 版に耐えうる質の写真が撮  
 れなかった種については、  
 イラストで対応できる。